

Syndrome Xの末梢動脈血管内皮機能

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Yoshio, Hiroyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00060885

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



Syndrome Xの末梢動脈血管内皮機能

Research Project

All▼

Project/Area Number

09770477

Research Category

Grant-in-Aid for Encouragement of Young Scientists (A)

Allocation Type

Single-year Grants

Research Field

Circulatory organs internal medicine

Research Institution

Kanazawa University

Principal Investigator

由雄 裕之 金沢大学, 医学部・附属病院, 助手 (10242546)

Project Period (FY)

1997 – 1998

Project Status

Completed (Fiscal Year 1998)

Budget Amount *help

¥2,000,000 (Direct Cost: ¥2,000,000)
Fiscal Year 1998: ¥500,000 (Direct Cost: ¥500,000)
Fiscal Year 1997: ¥1,500,000 (Direct Cost: ¥1,500,000)

Keywords

Syndrome X / 血管内皮機能 / 末梢動脈 / アセチルコリン / syndrome X

Research Abstract

Syndrome Xとは、典型的な運動誘発性の狭心痛を有し、心電図上も労作性狭心症と同様の変化を示すにもかかわらず、冠動脈造影上は異常を認めず、冠攣縮も否定された疾患群である。本症は冠微小血管の内皮機能異常が重要な病因の一つであり、この異常が全身性の末梢動脈に及んでいるか否かについては、きわめて興味をひくテーマである。そこで、Syndrome X患者の末梢動脈の血管内皮機能が傷害されている否か、また傷害されているとすればどの程度回復するかを、内服治療前と、胸痛発作の予防的治療により症状が安定した後に検討している。これまでは冠動脈微小血管の内皮機能異常にのみ注目されていた本症を、全身性の末梢動脈の内皮機能障害という新しい視点から見直しており、本症の病態生理学上、新たな知見を得る可能性がある。

平成10年12月現在まで、Syndrome X患者6例と、対照群として比較検討する予定の胸痛症候群患者10例が解析できた。硝酸イソソルビド投与時の血管内皮細胞非依存性血管拡張反応は両群間で差を認めていないが、アセチルコリン投与時の血管内皮細胞依存性血管拡張反応は、有意差は症例数が少なくまだないものの、Syndrome X患者群で対照群に比べ低下している。

今後も引き続き本研究を行い、さらに症例数を増やす予定である。また、得られた結果と患者の種々臨床的所見、特に、内服治療前後での運動負荷時のSTの低下度、狭心痛の程度、運動時間等を比較し、末梢動脈の血管内皮機能が臨床像に及ぼす影響や、治療効果との関係を考察する予定である。

Report (2 results)

1998 Annual Research Report

1997 Annual Research Report

URL: <https://kaken.nii.ac.jp/grant/KAKENHI-PROJECT-09770477/>

Published: 1997-03-31 Modified: 2016-04-21